

平成 21 年 6 月 3 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：平成 19 年度 ～ 平成 20 年度

課題番号：19611002

研究課題名（和文） アジア圏博物館ネットワークの構築、1 モンゴル

研究課題名（英文） Construction of the museum network in Asian block: (1) Mongolia

研究代表者

氏名（アルファベット） 鷓坂 智則（USAKA TOMONORI）

所属機関・所属部局名・職名 東京大学・総合研究博物館・助教

研究者番号 20323454

研究成果の概要：

計画の 2 年間でモンゴル科学アカデミーに収蔵され、荒廃していた標本の整理とデータベース化をおこなった。これにより、研究活用の可能性が大幅に改善された。また、これまでの研究成果をモンゴル自然誌博物館において展示する一方、東京大学総合研究博物館においても展示を開催した。日本とモンゴルの共同研究は学術論文として公表されるだけでなく、両国の市民、さらには博物館を訪問した多くの海外訪問者にも紹介された。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
平成 19 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
平成 20 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：情報科学

科研費の分科・細目：時限付き分科・博物館学

キーワード：博物館、動物、生態学、国際研究者交流、モンゴル

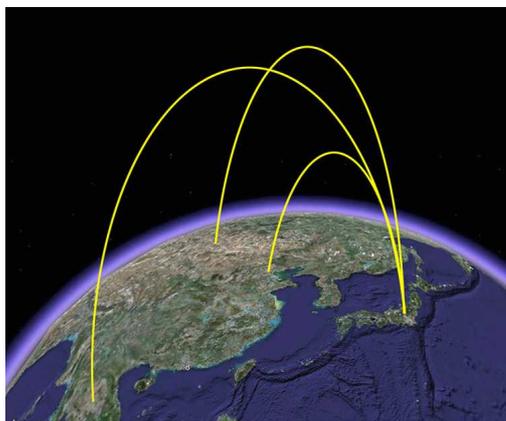
1. 研究開始当初の背景

過去 10 年ほどのあいだに日本国内で大学博物館が設立され、研究成果の収集、展示が充実してきたことは大きな成果であった（西野、2000）。それぞれの大学博物館では独自のカラーを保ちながら、一方でデータベースの共有化など横のつながりにも努力してきた。これらの活動に大学博物館第一号であった東京大学総合研究博物館が果たした役割は大きい。大学博物館の活動においては国内外の野外研究によって得られたデータと標

本群が持ち帰られ、それらがキュラトリアルワークによって標準化され、展示されてきた。これは通常の研究が学会で発表されたり、論文制作されて完了とされてきたのに対して、成果を広く社会に発信するという意味で意義深いことである（西野、1996）。

申請者が属する東京大学総合研究博物館の研究者はアジアを中心に海外調査をおこない、多大な研究成果を挙げてきた。その成果は本館において展示されるのにとどまっていたが、最近になってこれを打ち破るべく、

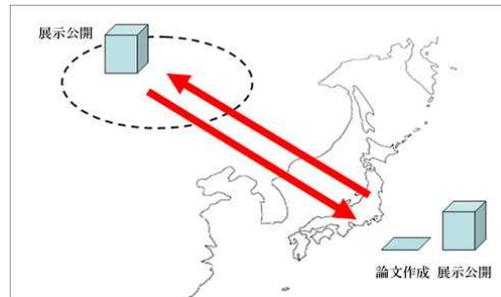
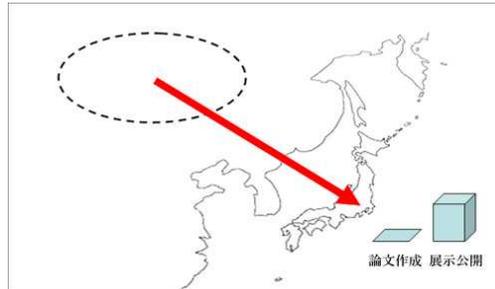
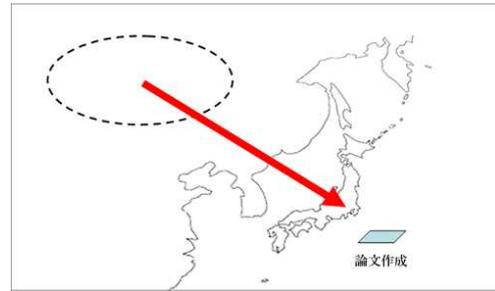
学外において機動性をもつ「モバイル・ミュージアム」をおこない、好評を得て来た。この機動性を活用すれば、海外においても展示も可能であるに違いない。ただしこれまでのモバイル・ミュージアムは海外で展示がおこなわれたことはなく、これが実現すれば野外調査で多大な貢献をして頂いている対象国への成果の還元という意味でも大きな意義を有している。そしてそのほかの多くのアジア諸国における博物館と同様の協働をすることによってネットワークを構築し、博物館間の基準化をはかる。これを実現することにより、展示することが新たな研究アイデアを産み、異なる国が協働することがさらに深い研究を創出することが期待される。



東京大学総合研究博物館が核となってアジア圏博物館ネットワークを構築する

2. 研究の目的

東京大学総合研究博物館では、過去 10 年間の研究活動と展示活動の経験をふまえ、上記の背景から本館の研究者がとくに野外調査の経験が豊富なアジア圏において、国外展示とそのための学術標本の交流を進めるべきであるという意志が強くなり、これまでその基盤作りをおこなってきた。このプロジェクトはアジア圏を広くカバーするものであるが、本計画では最も実現性の高い国のひとつであるモンゴル国を例にとり、標本整備と展示をおこなうことを目的としている。本研究は大学における第一級の研究を広く一般に発信するという大学博物館の使命の具体的活動のうち、先進国によっておこなわれた成果を国内で展示するという、従来の「開発途上国から先進国へ」という流れに、それを「開発途上国に還元する」という逆向きの流れを作るというこれまでの日本の博物館にまったくなかった発想に立脚するという点に独創性がある（下図）。



データや試料を持ち帰って論文を書くことから、それを展示公開する段階を経て、展示公開を「母国」に還元するという流れを作る。

データや試料を持ち帰って論文を書くことから、それを展示公開する段階を経て、展示公開を「母国」に還元するという流れを作る。

この独創性はアイデアとしてはありうるが、これまで東京大学総合研究博物館の研究者によっておこなわれてきた 1) アジア圏における営々たる野外調査と 2) その成果のキュatorialワーク、そして 3) 標本と研究に新たな命を与える展示の経験がなければ実現ができない。これら 3 つの要素の統合に関しては国内で東京大学総合研究博物館が最も大きな成果をあげてきた点であり、このことに大きな特色がある。その足がかりとなるモンゴルにおいて本計画が実施されれば、これまでのモンゴルにおける標本収集の充実と日本-モンゴルの生態学研究のレベルの高さ (Campos-Arceiz and Takatsuki, 2004, Ito, Takatsuki et al. 2005) を、モンゴルの一般市民に知るところとなり、その文化的価値はきわ

めて高いものとなるであろう。またわが国の展示技術はそれらの標本群のみならず、動植物の生態学的知見をデジタル技術を含めてディスプレイすることが可能であり、モンゴル市民のみならずモンゴルの研究者を驚嘆せしめることは確実である。このような動きはアジア圏の博物学の振興に大きな刺激となり、文化的に大きな進展をもたらすことが期待される。

3. 研究の方法

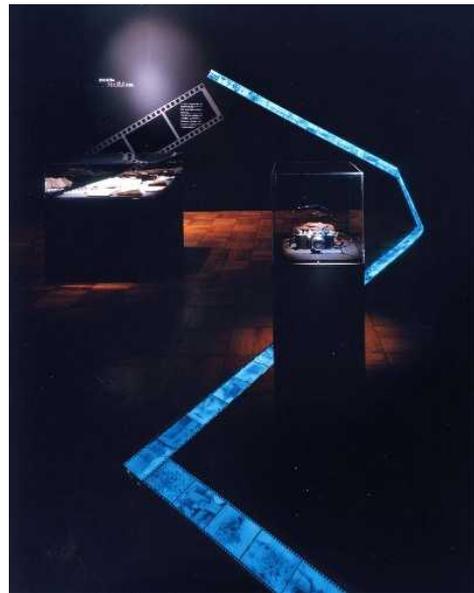
初年度は分担者である高槻が過去数年間共同研究を進めて来たモンゴル科学アカデミーとモンゴル自然史博物館との協働活動として、標本の整理とデータベース構築を行う。モンゴルにおいては1992年の体制変化によって旧ソ連時代の標本が混乱状態にあり、その整備が必要であるが、経済的な理由からまったく進んでおらず、急速に劣化している。そこで、これらの標本の現状を把握し、ラベルの確認、データベースの構築などをおこなう。この作業には標本とラベルの対応、標本の状態の記載、台帳との対応チェック、汚れや破損の修復などを含む。それをもとにデータベースを構築する。これは哺乳類学の専門である高槻成紀と林良博が担当する。標本の修復などには高槻の指導により、モンゴルの大学院生が当たる。データベースの整備には鶴坂智則が当たる。この作業にはソ連体制時代の記述法の解釈や文献渉猟が不可欠であるため、モンゴル側の協力者を必要とする。

2年目にはその成果を現在の日本の大学博物館がおこなっているレベルの高度な展示をおこなう。前年度の調査によって標本群の全貌が明らかになるので、それをもとに展示のコンセプトを考える。これには多様な切り口がある。モンゴルという平坦で乾燥した環境に卓越する草原は、急峻で湿潤な環境の日本の森林ときわめて対照的である。このことから、日本とモンゴルの比較をすることは生態学的にきわめて興味深い。そのために環境から動植物までを、たとえばひとつの展示室に対比させながら展示することは強い説得力をもつであろう。また動物のサイズを比較する、あるいは肉食と草食を比較するなどの比較展示も興味深い。



従来型の並列的配列を一定の意図で配列すると新しい効果が生まれる

それらを標本と解説を組み合わせる展示装置を考案する。同じ展示物でも解説の様式やデザインによって見違えるように魅力的になることは東京大学総合研究博物館の展示において十分な経験をつみノウハウを持っている。これには全員が参画する。



展示は配置やレイアウトなどにより見違えるように魅力的になる

一方、日本とモンゴルの研究者によってモウコガゼルやそのほかの草原生態系の研究がおこなわれてきた。ことにモウコガゼルの長距離移動は世界で始めて明らかにされた。この移動ルートを大型ディスプレイによって動画展示すれば、魅力的な展示になるであ

ろう。

このような展示内容は日本とモンゴルの生物学研究者と日本の展示専門家が一同に議論することで創出される。東京大学総合研究博物館では研究者とデザイナーのコラボレーションにより大きな成果を生み、数々の授賞をしてきた。その経験を活かし、モンゴルの多様な生物相と日本の高度な展示技術との出会いの機会を作る。この作業には西野嘉章と鷗坂智則が当たる。

4. 研究成果

2007年7月11日～30日と8月22日～28日にモンゴルを訪問し、以下のことを行った。まず国立自然史博物館を訪問し、展示予定会場を下見した。次にモンゴル科学アカデミーを訪問し、標本整理の状況をきき、東京大学総合研究博物館への寄贈予定標本を見た。動物部門のラグバースーレン教授（部門長）は3ヶ月の訪日希望とのことであった。

2008年1月25日から2月25日までモンゴル科学アカデミーのラグバースーレン博士を、本計画の分担研究者である高槻成紀が所属する麻布大学に招聘した。この間、麻布大学において博物館学と動物生態学を修得してもらい、セミナーを開催した。また秋篠宮殿下が来訪されたときに同席してもらい、学術交流をしてもらった。そして、2008年の夏におこなわれる東大での展示と、モンゴル国立自然史博物館でおこなわれる展示についての打ち合わせをおこなった。そして、展示試料の説明文の原稿を書くなどの共同作業をおこなった。

2008年には展示の準備のために5月にモンゴルを訪問し、7月には以下の展示を実施した。

Mongolian Wildlife: Findings of Japan-Mongolia Joint Team



展示をおこなったモンゴル自然誌博物館

この展示のために、林東京大学総合研究博物館館長とモンゴル自然史博物館を訪問した。

開会式ではモンゴル科学アカデミー、国立公園関係者、Patrisia D. Moehlman 博士など野生動物研究者や支援機関関係者などが集ま

った。始めにモンゴル科学アカデミーのチャドラー所長から挨拶があり、次に市橋康吉特命全権日本大使から祝辞が述べられ、林館長から挨拶があった。

展示では博物館所蔵の標本を木製ケースによって展示するとともに、日本とモンゴルの研究成果を5分ほどのスライドにまとめこれを投影した。



展示室の内部



スライドによる投影の例

会期中に10カ国以上の国から17,000名、モンゴルから16,000名もの訪問者があった。

国内では2008年7月から2009年2月まで東京大学総合研究博物館において「草原の国の野生動物 モンゴルから寄贈された哺乳類標本」を展示した。

この計画は研究成果をあげるよりも標本整理と展示を目的としたものであり、とくに国際的に連携をとって実施したことは大きな意義がある。モンゴル自然誌博物館はウランバートルの観光地にもなっているため、会期中にさまざまな国の17,000名もの訪問者があったことは有意義であった。またモンゴル市民が研究によって得られた成果を見ることで、モンゴルの野生動物の魅力を確認したことは、将来のモンゴルの野生動物の保全にとっても有意義なことであった。

またこの計画はアジア圏の博物館ネットワーク構築の構想の出発としておこなわれたも

のであり、今後のさらなる展開のひとつのモデルを示したといえよう。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

1. 高槻成紀, "モンゴルでの野生動物生態学研究の展示," ウロボロス(東京大学総合研究博物館ニュース), vol.13, No.2, pp.4-6, 2008年(査読無し)

http://www.um.u-tokyo.ac.jp/web_museum/ouroboros/v13n2/ouroboros_v13n2_top.html

〔その他〕

博物館展示:

1. "Mongolian Wildlife: Findings of Japan-Mongolia Joint Team," July-September, 2008, Natural History Museum of Mongolia

2. "草原の国の野生動物: モンゴルから寄贈された哺乳類標本展," 2008年7月26日~2009年2月13日, 東京大学総合研究博物館

関連 web ページ:

1. 在モンゴル日本大使館ホームページでの紹介記事:

<http://www.mn.emb-japan.go.jp/news/jp603.html>

2. 東京大学総合研究博物館「モバイルミュージアムの海外ネットワーク「日本モンゴル協同隊による野生動物調査」展案内ページ:

<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/mobilemuseum/M011MN-MONGOLIA.html>

3. 東京大学総合研究博物館「草原の国の野生動物: モンゴルから寄贈された哺乳類標本展」展示案内ページ:

<http://www.um.u-tokyo.ac.jp/exhibition/2008mongolia.html>

6. 研究組織

(1)研究代表者

鶴坂 智則 (USAKA TOMONORI)

東京大学・総合研究博物館・助教

研究者番号: 20323454

(2)研究分担者

林 良博 (HAYASHI YOSHIHIRO)

東京大学・農学生命科学研究科・教授

研究者番号: 90092303

西野 嘉章 (NISHINO YOSHIAKI)

東京大学・総合研究博物館・教授

研究者番号: 20172679

高槻 成紀 (TAKATSUKI SEIKI)

麻布大学・獣医学部・教授

研究者番号: 00124595